

## 天賦のもの一笑いと詩

～霊長類ヒト科ヒトの宝もの～

浅井民子

この地球上の生物が現在の形になるまでに四億年ほどかかっているそうです。小さな蟻も猿も大きな象も、鳥も魚も、微生物も、その生物の中で、「笑い」を持っているものは唯一、霊長類ヒト科ヒトだけです。笑いは優れて人間的なもので、怒りや悲しみなどの表現は他の動物にも見られますが、笑うのは人間のみです。笑いは他者との共感を生み出す社会的スキルと言われます。また、言葉を持ち、文字を持ち、詩を詠むことが出来るのはヒトだけです。ドイツの詩人ヘルダーリンは「…詩を詠むことは、言葉を持った人間にしか出来ないことだ…」と述べたそうです。「笑い」と詩」このふたつは人間にだけ与えられた天賦のものと言えましょう。

人間だけが笑うと言ったのは、今から二千年も前、アリストテレスです。笑いと一口に言いますが、実生活においては、微笑、哄笑、苦笑、冷笑、嘲笑、失笑と様々なものがあります。しかし、負の笑いは笑いとは言えません。笑いはおかしさの笑い、つまり、正の感情であり快の感情である機知、滑稽、諧謔などで、ユーモアとも言います。

日本では昔から「笑いは百薬の長」と言いますが、同様のことを、米国の著名なジャーナリスト、ノーマン・カズンズが語っています。彼は笑う事によって、重篤な膠原病から快復しました。「笑いのプラシーボ（偽薬）効果」は、人類が生きるために身に着けた知恵」と語り、「笑いの医学的効果」として、「笑い」が心の栄養なら、「ビタミン」は体の栄養と述べています。チャールズ・チャップリンは、ユーモアは人間の生存意識を高め健全な精神を支える。ユーモアがあれば人生の有為転変も比較的軽く乗り切れると語ったそうです。

ヴィクトール・E・フランクは第二次大戦中のナチ強制収容所での生活を『夜と霧』に書き、ユーモアが生存の上の重要な「武器」、自分を見失わないための「武器」であったと明かしています。人間が生きるためには、冗談を言って笑い合うようなユーモアこそ究極のサバイバル術と語ります。

「笑い」は理性に関わるもので、芸術と笑いは密接な関係があり、文芸の分野においても同様でしょう。

当「滑稽俳句論壇・一七七」で、秋尾敏氏が「…正岡子規は俳句の本質には滑稽があると認めており、子規一門は滑稽俳句の研究に熱心だった。俳諧の滑稽をドイツ文学のフモール（英文学でのユーモア）に結びつけ、滑稽文学の基礎理論をまとめたのも子規一門の中川四明であり… “有情滑稽” という概念を作り至高の笑いと考えた。略」と論じておられ、大いに納得しました。

文字を持つ唯一の動物・ヒトは、唯一、詩を詠み読むことが出来ます。俳句を詠むことが出来ます。機知、滑稽、俳諧味を含んだ俳諧、俳句は「天賦の笑いと詩」の二つの宝が織りなす豊かなものです。たった十七音字の世界最小の詩型が、時空を超え広く深く果てしなく大きな世界を内包しています。笑いはヒトの「想像力」を刺激し、想像力は芸術の根幹ともいえる「創造力」をもたらします。「笑う門には福来る」。令和六年が良き一年となりますよう。